

東大寺東塔院跡の調査

奈良文化財研究所では、東大寺が主体となり結成された史跡東大寺旧境内発掘調査団に、奈良県立橿原考古学研究所とともに参加しています。そして、昨年度から東塔院跡の発掘調査を開始し、2016年度もひきつづき当該地の調査にあたりました。調査期間は7月19日～12月15日、調査面積は合計821㎡です。

東塔院は、対をなす西塔とともに当代随一の高さを誇った七重塔と、それを囲む回廊等からなります。創建は奈良時代に遡りますが、平安時代末、平重衡の南都焼き討ちに遭い、焼亡の憂き目を見ました。鎌倉時代に入り一度は再建されたものの、南北朝時代に落雷により再び焼失し、調査開始前には塔基壇の跡が巨大な高まりとして残るのみでした。

昨年度の調査では、鎌倉時代に再建された塔の基壇外装の最下部やその外側の石敷きが、良好な状態で遺存していることを確認しました。また、基壇上で礎石の抜取穴を検出し、塔本体の建物構造の解明に資するデータも得ることができました。

今年度は、塔基壇の中心から周辺部を含む北東部分の再発掘に加え、塔基壇の南面西寄りに新規

の調査区を設定しました。鎌倉時代再建塔のさらなる実態解明を期しつつ、奈良時代の創建の塔についても、満を持して本格的な調査に乗り出したのです。調査開始日、武者震いするような心持ちで現場に臨んだことを思い出します。

基壇南面は、昨年度に調査した北面や東面に比べると、再建塔の遺構の残りは良くありませんでした。いっぽう、基壇上の礎石抜取穴の真下で環状に配された石列が新たにみつかる等、鎌倉時代の基壇の構築法に関する知見を深めることができました。

驚かされたのは、奈良時代創建塔の遺構の残りの良さです。南面階段部分では、再建塔の盛土の上に、創建塔の基壇外装の一部が顔を覗かせていました。さらに北面階段部分では、創建塔の階段の踏石が再建塔基壇の盛土の中にそのままの状態に残っていました。鎌倉時代の再建時に一回り大きく造り直された基壇が、奈良時代創建塔の基壇をすっぽりと包み込み、護ってくれていたのです。そう、まるでタイムカプセルのように。

よく見ると、その踏石は表面が黒く焦げ付いています。焼き討ちによる火災の痕跡です。燃え上がり、崩れ落ちてゆく巨塔——東塔を焼き尽くした紅蓮の炎が、眼前に迫り来るようです。

なお、今年度は回廊南面に開く南門の位置特定等を目的とした調査もおこないましたが、回廊については来年度以降、本格的な調査を順次実施していく予定です。七重塔とともに壮麗な東塔院を構成した回廊の在りし日の姿も、徐々にあきらかになるでしょう。今後の成果にもご期待ください。

(都城発掘調査部 山本 祥隆)



塔基壇調査区の全景（南西から）



創建塔の北面階段の踏石（北東から）